

【特別寄稿】

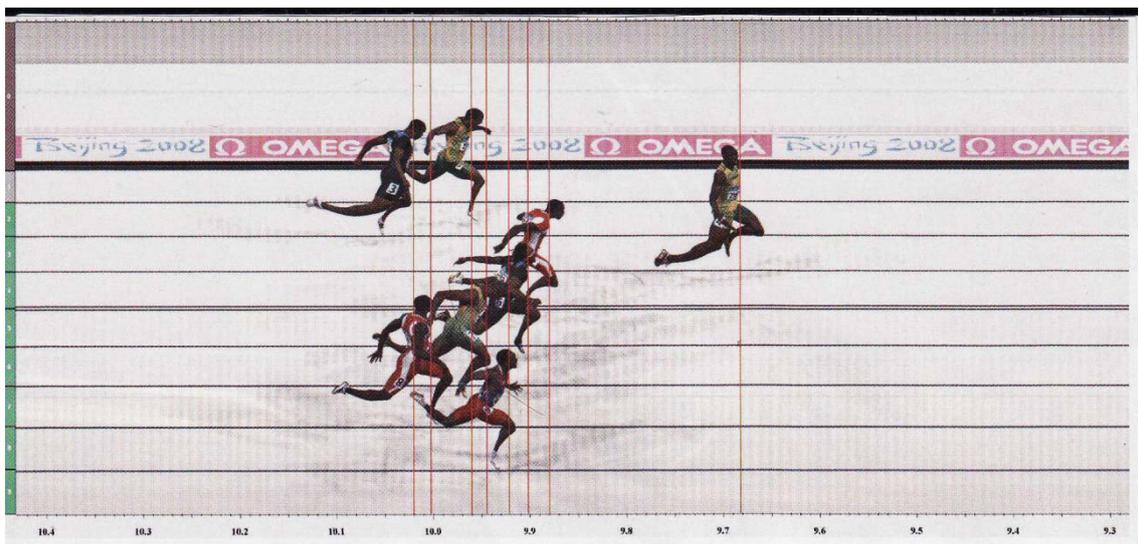
時を計る

放送大学名誉教授 柏倉康夫

人間が時間を計ることをはじめた一つは、古代エジプトで巨大なオベリスクの影を日時計に見立てたこととされる。古代エジプトでは水時計も用いており、1日を12時間2組に分けて時間を計った。

機械時計は世界各地で並行して発明されたが、中世ヨーロッパでは祈祷などの時間が厳格に定められ、それを守るために修道僧が最初の機械時計をつくった。こうした西洋式の機械時計が日本にもたらされたのは1551年で、宣教師フランシスコ・ザビエルが、周防の戦国大名、大内義隆に献上したものが最初だった。この時計は1日24時間、均等に時を刻んだ。だが鎖国が始まると、時計に日本独自の改良が加えられるようになった。自然の移り変わりに依存して生活する日本では、「一刻」の長さが季節によって変化し、これに合わせる工夫が施されたのである。

幕末に日本にやってきた西欧人の間では、日本人は時間にルーズだという評判がたった。しかし、これは時間に対する考え方の違いで、自然の運行とともに生活していた日本人の時間意識は、ある意味で健全だったともいえる。だが、近代化を進める明治政府は、明治6年(1873)に西欧と同じ「定時法」を採用し、時間を守る意識を国民に植えつける努力をした。それから142年、いまや日本の交通機関の時間の正確さは世界中の評判となり、私たちは時間に追われる生活を送っている。



北京オリンピック 100メートル決勝

スイスのローザンヌにあるオリンピック博物館で、2014年6月から15年1月まで開かれた展覧会『時間を追って走る (COURIR APRÈS LE TEMPS)』は、時計という新たなテクノ

ロジーの発達が人間の意識をどう変えたかを考えさせるものだった。

写真は、2008年北京オリンピックの男子100メートル決勝のゴールの瞬間である。優勝したジャマイカのウサイン・ボルトは、9.69秒の世界記録でゴールしたことを示している。

いま、陸上競技や水泳などでは、タイムは100分の1秒の単位まで計測されるようになった。だが、古代オリンピック競技では、時間は計測されることがなく、人よりも速く走った者が勝者として栄冠を勝ち得た。この展覧会でも展示されていたが、100メートル競争で最初にタイムが計測されたのは1864年、ロンドンでのことである。このとき、ストップウォッチのもとになるものが使われ、人間は時間を計る精巧な機械を手にしていたのである。

それから28年後の1896年、フランスのピエール・ド・クーベルタン男爵によって、近代オリンピックの幕が切って落とされた。オリンピックのモットーは「勝つことより参加すること」とされたが、このときすでに速さを計るテクノロジーは出来上がりつつあった。これに、アメリカのエドワード・マイブリッジやフランスのエチエンヌ＝ジュール・マレーが発明した、動きを連続して記録できる装置（映画の前身）の登場が拍車をかけた。運動は分解され、瞬間の動作が目に見えるものとなり、競技者が「時間を追って走る」状況が生まれたのである。

時計——時を刻むテクノロジーの発展は、一般の生活にも大きな変化をもたらさずにはおかなかった。腕時計の誕生は19世紀にさかのぼる。戦争で懐中時計を片手に砲撃のタイミングを計っていた砲手が、あるときそれを手首にくくりつける工夫をしたのがきっかけで、ドイツのヴィルヘルム1世は、1879年にドイツ海軍用としてスイスの時計師ジラルム・ベルコに、腕時計2,000個の製作を命じた。その後、1900年にスイスのオメガが腕時計を商品化して売り出し、さらに、第一次大戦が腕時計の普及をうながす契機となった。将校は戦場で腕時計を見つつ、一斉突撃の号令を出したのだった。

時計の普及はあらゆる分野におよんだ。フォードのテイラー・システムによる自動車の大量生産がはじまると、労働者の賃金は労働時間で計算されるようになった。やがて雇用人の賃金計算を円滑にする目的で、アメリカではジョン・C・ウイルソンによってタイム・レコーダーが発明された。放送大学の印刷教材でも触れたが、この便利な機械は、その後多くの企業で採用され、労働者の賃金は労働時間に見合って正確に支払われるようになった。だが一方で、ストレスを増大させる結果ともなった。アメリカの精神科医ジョージ・ピアードが1881年に発表した研究によると、腕時計やタイム・レコーダーの出現で、アメリカでは神経失調が増えたという。人びとは遅刻という強迫観念にとりつかれ、時間を絶えず気にし、時間にしばられて生活するようになった。

こうした呪縛を解きつつあるのが、パーソナル・コンピュータとそれを結ぶネットワークの登場だった。人びとは同じ場所に集まることなく、分散して情報を共有しつつ仕事をする場面が急速に広がっている。私たちは労働時間の多寡ではなく、成果によって仕事を評価する時代を迎えている。だが、私たちは時間から解放されたのか。今度はパーソナル・コンピュータに送られてくるe-mailへの返信をせかされて、またまた時間の虜となるのではないのか。